

第5期第6回生涯学習センター運営協議会議事要旨

〔日 時〕 2020年12月25日（金） 午後2時～4時

〔場 所〕 町田市生涯学習センター ホール

〔出席者〕 ※敬称略

委 員：陶山慎治（会長）、古里貴士（副会長）、相澤真理、荒井容子、大野浩子、白崎好邦、関村浩、堂前雅史、西澤正彦、服部くに子、山口隆三、以上11名
（内リモート参加2名）

〔欠席者〕 荒井仁

事務局：塩田センター長、田中担当課長、岡田管理係長、高木事業係長、三橋主任

〔傍聴人〕 2名

〔資 料〕 【1】 都公連資料

【2】 第5回課題に対する各委員資料

1 報告事項

（1）センター長報告

- ・ 公民館研究大会の動画配信による基調講演「コロナ時代に向き合う公民館」講師・千葉大学名誉教授・長澤成次氏の収録は無事終了した。配信は2月10日から。
- ・ センターまつりについて、昨年度は2千人を超える来館者があったが、本年度のホームページ上での開催のアクセス数は、既にそれを越えている。

（2）東京都公民館連絡協議会について

○白崎委員から資料に基づき報告

- ・ 12月23日開催の第9回委員部会について、協議事項の「第4課題別集会ミニ発表会」についてなど報告する。

2 議 題

（1）審議会答申・改革プランを踏まえた生涯学習センター事業の推進について

【会長】 本日のテーマは「誰もが学べる環境を作る」の2回目です。この「誰もが」について、前回会議で「子育て中の親子」「障害のある方」「高齢者」「外国人の方」などが出された。各委員は提出された資料について報告いただきたい。

- ・ オンラインやインターネットが重要な時代に来ている。生涯学習センターがそれらに力を入れていることが知れ渡ることが重要。学ぶ意欲はあるが、ここに足を運ばない人たちに届く。ホームページではこれから実施される事業は見えるが、このセンターの活動が見えるようにすることがとても大事。「HATS」や「ことぶき大学」の年間スケジュールが分かりやすく見えるのが大事。お年寄りをおいてけぼりにしないで、パソコンの電源の入れ方から学べる講座などをセンターが行うべき。地域の担い手の発掘・育成も大事。「利用者交流会」はまつり参加団体の交流を目的に始まったが、今では実践に繋げる活動に発展している。館内のWi-Fiの整備や気楽に来られるコミュニティカフェの開催など学習環境の整備も必要。

- ・アウトリーチとして、オンライン学習の継続発展、冒険遊び場とのコラボ、地域に出前公民館をしてほしい。一方、人とのふれあいができる場として気軽に立ち寄れるスポットの設置。環境を作るとして保育付き相談コーナーやWi-Fiの設置。外国人への対応として翻訳機、休憩室の設置が必要。
- ・元々何かをしようとしている方たちではなく、そうでない方たちにどうアクションを起こしていくか、こちらが一步踏み出す必要がある。行政は縦割りだが横連携をしないと情報は広がらない。小さい子どもがいる母親たちのグループからは、電子媒体よりも紙媒体の情報を。コロナ禍だが事業を減らさないで開催して欲しいという強い要望もあった。また、募集人数が少ないため参加できない人がいる。少人数の講座を複数回すると良い。学校の外国人講師の方からは、「そもそも、外国は行政によるサービスが少ないので、日本でサービスがあることを知らない。また、外国人は皆英語が話せると思っているが、自国語しか話せない人が多いので、どの言語が一番わかりやすいか考えると良い」とアドバイスされた。
- ・アンケート結果が出たら、生涯学習センターの認知度を高めるため、どのように発信したら良いか、良い方向性が見つかることを期待している。SNS等が普及しているが、高齢者や弱者には紙媒体は絶対必要。障がい者には、知的や身体、精神、難病など範囲は広く、これらの方たちにどのように情報発信していくか。学ぶためには、屋外の利用も有効。冒険遊び場など広く連携し、そのコーディネートを生涯学習センターが担っていけば、少しはスムーズにいくのではないかと。学習環境が整っていない人もある、その拠点として生涯学習センターや障がい者施設の空き時間、学校の空き教室などを利用して拠点づくりができれば良い。
- ・新型コロナウイルスの感染では、人を集めることを止めるよう言われている。そのことに注目しないで議論を重ねても意味がない。テレワークが一般的になり、デジタル空間で人が繋がり生活の一部になっている。デジタル空間に切り替えないとコロナ後の世界では生き残れない。生涯学習センターは放送局のようなもの。方法論は資料に書いてあるとおりで、ほとんどの方が親しめる空間が作れる。
- ・生涯学習センターが色々なところに繋がること。町田市には優秀な市民がいっぱいいる。その方たちの力が発揮できる環境にできないかを背景にまとめた。生涯学習センターが保育園や子どもセンターに出張して、親向け学習事業を開催する。家庭での弁当作りを教えるボランティアを派遣する。筑波大学は障がいのある学生の受け入れを盛んに行っている。障がいの有るなしに関係なく共に学ぶということで、障がい者への学習支援を市内の大学で行えないか、長期入院している人たちにも学習機会をつくることを市民病院でできないか。高齢者のデイサービスでは改めて何かを学ぶということができていない。厚生労働省の介護保険サービスと生涯学習がコラボして講座を開催できないか。介護予防日常生活支援総合事業は市民中心で行う事業だが、場所が見つからないので体育館や図書館でできたら良い。定年退職したら大学院に行くのも良い。外国人は、入国理由が違くと交わる機会がないので、意図的に集めて孤立化を防ぐ。国際交流センターと共同で、特定技能実習生に対する学習支援と組んだらどうか。全体的には地域住民が中心になった地域生涯学習センターの設置や来られない方へのタブレットの貸出し、オンラインの配信が必要。
- ・生涯学習センターの参加者を増やす方法として、対象者を各団体の名簿や広報等により募集し、参加者に対して趣旨を文章やメールなどで通知する。講座テーマは要望の高いものになるが、ハウツーもので、それを専門家に分かりやすく説明してもらい、日常生活に活用してもらおう。学習はインターネットを活用し、パソコンで好きな時間に見られるようにもする。そして、各学習に参加した人へのフォローアップを郵便、メール等で行う。
- ・市民大学のプログラム委員会での記憶などを含めて話す。近年は全体として受講生の高齢化や減少が大きなことが課題。市民大学受講生は町田市の社会課題や地域課題等に参加する人になってほしいのだが、構造的に社会参加を志向する人々は時間的に余裕のある高齢

者になりがち。子育て世代や現役で働く世代に参加してもらうのは大きな課題。実際に社会で課題に直面している方たちは講座を知る余裕がないのではないか。例えば外国人の方が国際学、障がいのある方が福祉学を受ける形になると双方にとって良い意見を期待できるが、そういう繋がりにはできない。潜在的に生涯学習に繋がってこられない方たちを繋げていくのは重要。そのためにも市民が学びたいと思う講座を発掘していかないとけない。学び方は各講座によって違うが、環境に関してオンラインは重要で期待している。一方で市民のコミュニティを作っていくことも重要。自分たちの直面している課題と生涯学習が繋がるイメージを持っていない。または発信できていないこともある。修了生団体の姿を見えるようにすれば町田市の部署と連携している市民の姿が見える。生涯学習を通じて自分の身近な課題が解決できることを考えてもらうことが必要。会社は忙しいが地元に関心を持っている若い人たちもいる。地域に接触する機会を増やしていくにはどうしたら良いか考えていかなければいけない。

- ・冒険遊び場のここ1. 2日は、同じ乳幼児親子が20組、放課後デイサービスが十何人、韓国人のママたちがかまどを囲み、おじいちゃん毎日顔を出し、初めて来た外国人の方に英語で話しかけたらフランス人だった、その中でいきいきボランティアの方が作業をしているという様子。地域で子どもの取り巻く環境に関心を持ったママたちが始めた活動が20年以上たち、屋外の遊び場でありながら、年齢制限がなく、誰もが来て学び合い、支え合う場になっている。相互援助、学び合い、専門家でない人の関わり、気づきからの地域への波及など全て網羅できている。生涯学習センターについて、ママたちは「知っているが行ったことはない」「何をやっているか知らない」という人が多かった。ここを居場所にしている30代のママたちは必要としていない。参加しているママたちは、保育士の紹介や子どもセンターでチラシ見たからなど。今来ている人たちは0歳児の育休中のママたちが多い。思春期の性教育にも来る。1歳で働き始めるため講座終わってサークル始める時には半分いない。働くママたちにどうアプローチするか。逆に働かないママたちは「自分たちは社会で活躍できていない」「役にたてていない」と専業主婦に負い目を感じている。そういうママたちが活躍できる、学びの中で何かできたら良い。子どもから離れた、集中した学びを欲している。オンラインは子どもがじゃまするので集中できない。オンラインするなら小人数の会場や外の広場とするなど工夫が必要。また、現実に見える、刺激し合える、顔が見える、孤立しないための受け皿が必要。今、情報や行く場所が充実している中で自分たちから何かをすることは無い。本当の居場所は好きなことができる場所。支え合って学び合える、専門家でないと関われないのではなく、地域の色々な学びを経た人たちをキーマンにして専門家でない人たちをたくさん作っていくのが良い。
- ・町田市のごことは詳しくないが、誰もがという中で、生涯学習センターの昨年の利用者を人口15万として試算すると15%と少なく3割もない。生涯学習センターは1館しかないのでコミュニティセンター等を使って学習しているのかなと想像するが、認知度が低いということで地域格差はあるのか、生涯学習センターに来ないで学ぶことへの支援はどういうことなのか意識したほうが良い。若者の利用者が少ないことは世代格差で町田市側の問題ではなく、生活している環境の違いなど。オンライン整備は必要だが、学ぶ環境として、公共交通機関を使わなくても自宅の近くに社会教育施設があり、そこで活動できるありがたみについて実感するという情報がいっぱい来ている。町田市は、生涯学習センターが身近でなくても似たような施設が身近にあれば、それをサポートすることが必要。町田市でも生涯学習を支える職員が身近な施設にいる必要があることを自覚するべき。

○事務局から欠席者資料の説明

前回発言を受けて分野・課題の絞り込み資料としてマトリックスを作成した。この表から状況を5項目、今後の課題を3項目設け、「必要な支援の扱いをどこまで実現するのか」という問題定義、及び「オンライン授業の導入」「デジタル教材」などの提案がされている。

【会長】 副会長にまとめていただき、このあと意見交換します。

【副会長】 多義にわたる意見があった。今後もテーマが設けられているので、この後の時間はもう少し焦点を絞って議論すると良い。前回からの意見で具体的に出ていた、子育て中の方、障がい者など社会的に弱い立場に置かれやすい方たちが学習できる環境を作るにはどうしたら良いか。センターはどのように変わっていったら良いのか議論出来たら良い。大前提として、このセンターの存在や活動内容を知らない人たちが多くいることをどう乗り越えていくのか。皆さんの意見からその方向性として考えられることは「いかに手段を多様に持つか」。若い人たちでも紙媒体を求めている。その人に合った言葉、情報の伝え方をしなければいけない。市民のニーズに応える多様な発信をどうしていくか、議論をつめていければ。一つのやり方として参集型からオンラインへという意見と、参集型と参集しない・できない方を対象としたオンラインを並行して活用するという意見。昨日の障がい者青年学級の担当者の打ち合わせに参加し、オンライン参加の方がいるが、コンサートや劇の練習ではどうしても置いて行かれてしまう。担当者が代わりに思いを伝えるのが難しい部分があるという話があった。オンラインを広げる中で課題が出てきているなど、議論出来たら良い。

【会長】 質問や感想なども含めてご意見ください。

- ・国際学の講座がリモートで行われたが、なぜここに集まっているのか疑問だった。オンラインで発信できるのにやっていないのではないかな。思いきっていないだけではないかな。

【会長】 環境が整っていない、使いこなせない方へのサポートについて具体的方策のある方。

- ・できない人にはできるまでサポートするしかない。
- ・木曾山崎周辺でオンデマンド交通の実証が行われた。これではエリア内のバス停が30倍に増えたが利用するにはシステムを使いこなさなければいけない。この地域は50%超える人が高齢者なので、デジタルサポーターが必要という話になっている。
- ・こういう問題は一つの方法ですべてが救えるとは思えない。救えるところからやり、次に介助する人の養成、というようにしていくしかない。そしてそれはセンターがやるべきものでなければならない。
- ・コロナ対策で議論しているのではなく2年後3年後10年後のことを見据えてのあり方。町田は1館しかないが人員が多くいる。館が多いと分けられて人員が少なくなり、できることが限られてくる。町田の良いところは使うべき。

【会長】 限られた予算・人数の中で、オンライン配信していくにはお金がかかる。オンライン配信をどんどん進めていくとリアルは回数が減る。オンライン配信に市民の手を借りることもあると思う。多様な手段で伝えたり、市民に参加してもらうには。

- ・生涯学習センターが何をやっているのか何を調べたらわかるのかが分からない。募集している講座は一覧が出ている。カレンダーは直近の講座状況が分かる。NAV Iでは他の機関のイベントが分かる。紙では広報や市民大学、ことぶき大学の募集案内もある。生涯学習センターのメインの媒体は何か知りたい。必要な情報にたどり着きにくい。

【事務局】 ホームページが一番網羅している。募集やお知らせなど階層が錯綜して見つけにくくなっている。紙媒体は基本的に期限のあるものが優先されるので、活動内容の紹介などは掲載しにくくなっている。

- ・遊び場に来ている母親たちに、センターが来て直接紹介すればこんなところがあると分かると思う。

- ・外国人の方が口コミで広がるという話があり、何か拠点になる場所があると思うので、そこに行き話すことで波及することもあると思う。他部署と連携して情報をもらい出向いていくのも良いと思う。
- ・センター祭りやここにぶらっと来て活動しているのを知り、それが口コミで広がるのも大事。
- ・身近な活動場所で学べることを支えてくれることが誰でも学べることになる。本来は各地にあることが望ましいが、出来ないのなら、そこを考えると、地域格差を結びつけることが重要。
- ・地区の問題等担当しているところがあるが、それを変わってやるのではなく、そこと手を結び、サポートしたり、情報を流す。繋げることはセンターの役割。

3 その他

次回会議は1月18日午後2時から4時 ホールで開催

【副会長】昨日、青年学級担当者会の「くらし」がテーマのグループに参加した。その中で、障がいのある方が、「自分たちの置かれてきた状況とコロナ禍の状況が似ている。皆が自分たちと同じように制限のある暮らしをしていることで自分たちの置かれていた状況を感じ取ってくれているのではないか」という発言をした方がいたという話があった。コロナ禍でできないことを考えるのではなく、今まで感じ取ることができなかった気づき等をこの場を出し合いながら、すぐ解決は難しい学びの機会をいかに広く保証していくのかを次回以降で議論していきたいと思う。